建学七十八周年に寄せて

学校法人東海大学 理事長
松前 義昭

建学七十八周年の記念日にあたり、私の所感を述べさせていただきます。

本年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大防止の観点から、やむなく建学記念式典、建学祭、連合後援会総会・懇親会などを中止せざるを得ませんでした。また、本年度の大学・短期大学（部）のほとんどの授業は、オンラインによるリモート授業を実施し、後期からは一部対面授業を再開するなど、いちはやく学生の皆さんの学修環境を確保することに努めてきました。新入生の皆さんの、教室での対面によるコミュニケーションの実現に向けて、さらに安心で安全なキャンパスライフが可能となるように環境整備に取り組んでいるところです。

付属諸学校におきましては、対面授業が再開され、ほぼ従来と変わらない学びの環境を整えております。課外活動、各種行事など学園生活を豊かにする取り組みにつきましても、制限はありますが、安心と安全に配慮しながら教育活動を展開しているところです。

また、保護者の皆様に対する地区後援会総会の開催は中止となりましたが、個人面談につきましては、オンラインによる担当教員との面談を今まさに実施いたしております。

学園といたしましては、刻々と変化する社会情勢等を踏まえながら、感染予防対策を継続しつつ、できるだけ早い段階での正常化を期しているところです。

さて、私は例年、建学記念式典で、本学園の教育・研究活動にご理解とご協力をいただいている皆様に対しまして、謝意をお伝えしてまいりました。本年度は、この書面の上になりますが、これまでの本学園の歴史づくりにご協力いただきました皆様に対しまして、学園を代表し、改めて心からの感謝の気持ちをお伝えいたします。

また、例年私は、学園の創立者松前重義がなぜ東海大学という教育機関を創設したのか、その源流である建学の精神の背景となる物語を、皆様にお話してきました。そのお話につきましては、同封の「東海大学建学の思想とその源泉」をお読みいただければと思います。

今回は、こうした冊子の形で私の考えをお伝えする機会を得ましたので、これまでとは少し違った方法で本学園の歴史を振り返ってみたいと思います。

東海大学は、一九五〇年に新制大学として新たなスタートを切りましたが、その後の歩みは多難を極め、一時は廃校の危機に瀕するほどでした。そうした危機を乗り越え今日に至った要因はどこにあったのか。そこで、今回は、建学三十周年記念式典の松前重義総長（当時）の式辞、建学五十周年記念式典の松前達郎総長の式辞、建学七十五周年記念式典の開式にあたって私が申し上げた内容を通して、これまでの学園の歩みを振り返り、「変えてはならないものと変えなければならないもの」を改めて見つめなおす機会としたいと思います。

そして、二十世紀から二十一世紀へという時代の節目と大きな転換期に、私たちは何を目指してきたのか。それらの式辞の中から、今日の私たちはどのようなメッセージを読み取り、次代へつなげていくのかを考えてみたいと思います。

一九七二年の建学三十周年は、戦後の苦難を乗り越え、学園が、国の高度成長の中で拡大を続け、九州東海大学、北海道東海大学、そして東海大学医学部開設を前にして、今日の総合学園、一貫教育体制の基盤を

築いた時期といえます。

一九七〇年には、国際交流の拠点としてデンマーク・コペンハーゲン近郊に東海大学ヨーロッパ学術センターを開設し、欧州諸国との相互理解の足掛かりとなる場を築いています。まさに本学園は拡充期の真っただ中にありました。

こうした中で迎えた建学三十周年に、創立者は物質文明のゆがみを精神文明の洗礼によって正さなければならない、と強く訴えています。

●建学三十周年記念式典　松前重義総長の式辞（抜粋）

今後、本学のなすべき課題、残れる問題はまだまだ無限に存在するだろう。まず第一に、形はできてもその精神が死んだのでは問題にならない。我々は建学の精神の語源に対して、あくまでもその理想に向かってまい進しなければならないのである。

◇

建学の精神についてはしばしば申し上げてきたが、ここにもう一度述べておきたい。十九世紀、二十世紀を通じて人類の社会を支配している唯物思想、即ち物質万能の思想―資本主義であろうと、共産主義であるとにかかわらず―の生んだ社会的な影響は一体何であるか、すでに皆さんご承知のところであろう。物質万能の思想の車が真っしぐらに走り、その後には、万丈の汚濁のゴミが残るのであり、それを今人類は吸っている。これは何も物理的な姿ばかりでなく、精神的な汚濁の塵を吸いながら人類は今や滅びつつあるとまでいわれている。

我々はここに、いわゆる唯物思想の上に立たない建学の精神、即ちヒューマニズムの上に立つ建学の精神を基調として十八世紀、十九世紀を支配し、そしてまた二十世紀にいたった物質万能主義に闘いを挑み、そしてヒューマニズムの復活、人道主義の復活によって新しい社会をつくらなければならない。これを目的としてその教育体制の確立に努力をしなければならない、これが本学の目指すところである。

我々の前進の前には多くの困難が横たわるだろう。今日までも幾度となく横たわっていた。今後においてまだ多くの闘いが残されていることは想像に難くない。

◇

これらの困難を乗越え、闘いに勝たなければならない。覚悟を新たにして、皆様方とともに一致団結、理事者と教職員と学生と父兄の皆さん方と、また地域社会の皆様方、卒業生の皆さん方とともにスクラムを組んで、一体となって、本学の建学の理想達成のために、今までより以上にたくましい前進をつづけなければならない。

◇

創立者は以上のように述べ、高度成長に沸く世の中は物質万能主義に汚染されており、これを是正するにはヒューマニズムに立脚した社会の形成と人づくりに邁進しなければならないと、力強く語っています。

また、拡充期にあった本学園に対しても「形はできてもその精神が死んだのでは問題にならない」と厳しく現状をみつめています。そしてこの先も困難が続くことを見据えながら、温かい友情に包まれながらともに手を取り合ってスクラムを組んで前進に前進を続けようと、学園に集う人々の協力を呼び掛けています。

それから二十年、一九九二年の建学五十周年は、前年に創立者を亡くしての式典でした。そこで松前達郎総長は、創立者松前重義亡き後の学園をいかに展開していくか、新たな時代に向かって飛躍を誓いました。

●建学五十周年記念式典　松前達郎総長の式辞（抜粋）

東海大学建学五十年の有史以前の歴史を見る時に、その中に流れております思想と精神を汲み取ることができると思います。井戸の水を飲もうとするものは、その井戸を掘った人のことを考えなければならない、という言葉がございます。われわれはいま、松前重義博士が同志の方々と掘ってきた東海大学という井戸の水を飲むものといたしまして、松前重義博士を先頭に歴史をつくってきた方々の努力に対し、畏敬の念と感謝の気持ちを持たなければならないと思います。そして東海大学という井戸の水は、いつまでも変わらない清き理想の水であり、いつまでも枯らしてはならない水でなければならないと思います。なぜならば、その水が本学の建学の精神そのものであると考えるからであります。

東海大学は、建学の精神である愛と正義の思想の実践を通じて、われわれ人類が繰り返してきた対立と戦いの長い歴史を克服し、新しい文明の創造の改革者となるべき人材育成をめざして努力を重ねてまいりました。この建学の思想は、今後も変えてはならないものとして永遠に持ち続けていかなければならないのは当然であります。今後、建学の精神を具体的に教育研究の分野で活かすためには、常に、現代という時代を正しく捉えることが重要だと思います。

時あたかも環境や人口問題が地球規模の問題となり、南北格差や地域的な紛争が絶えないように、私たちは数多くの問題を抱えております。

◇

この中で松前達郎総長は、地球規模で進む環境破壊や南北格差、地域紛争に触れ、世界が大きな転換期にあることを述べています。創立者が亡くなった一九九一年は湾岸戦争が勃発し、またソ連が崩壊するという歴史的な出来事が起きた年でした。そしてその後、世界は急速なグローバル化が進みました。このことは今日の世界情勢に大きな影響を及ぼしています。こうした時代認識のもとに、「人類が抱えるこれらの課題から離れて、教育の意義はありえないと思います。教育の使命が改めて問われる」と私たちの使命について述べているのです。

また、「建学の精神である愛と正義の思想の実践を通じて、われわれ人類が繰り返してきた対立と戦いの長

い歴史を克服し、新しい文明の創造の改革者となるべき人材育成をめざして努力を重ねてまいりました。この建学の思想は、今後も変えてはならないものとして永遠に持ち続けていかなければならないのは当然であります」と、変えてはならないものは何かを明確に示しています。

松前達郎総長が語っている「愛と正義の思想の実践」とは、建学三十周年において創立者が述べた「ヒューマニズムの上に立つ建学の精神を基調」とした教育体制の確立ということにほかなりません。松前達郎総長は、創立者の思想を新しい言葉で表現し、私たちが変えてはならないものとは何かを述べているのです。

さて、二〇一七年の建学七十五周年は、学園を取り巻く環境の大きな変化を踏まえ、新たな学園の基盤づくりと建学百周年へ向かう学園のビジョンを明らかにしました。

振り返れば、五十周年から七十五周年までの二十五年の歳月は、まさに二十一世紀の学園はいかにあるべきかを模索した時代でもあります。一九九一年に大学設置基準の大綱化が実施され、設置基準の規制緩和が行われました。また、情報技術の発展は目覚ましく、ネットワークをはじめとする社会インフラの整備などにより、大学運営を取り巻く環境は、高度情報化社会へと変化を遂げていく時代でした。

こうした時代背景の中、本学園においても授業改革やプロジェクト型教育を他に先駆けて導入するなど、教育システムの改革、学部・学科の改組改編、さらに二〇〇八年には東海大学、九州東海大学、北海道東海大学を東海大学として一つに統合するなど、大きな改革を断行し、より学園のスケールメリットを生かした体制を構築し、今日の全国型の広域総合学園としての骨格を築いたのです。

また、付属諸学校におきましても、地域から、より信頼を得られる中高一貫教育の推進や、さらなる教育

改革を実施し、そのうえで校名変更を行うなど、より強固な一貫教育体制づくりに邁進してきました。

建学五十周年において松前達郎総長は、私たちが培ってきた本学園の特徴を再評価してみる必要があると述べています。そしてその特徴について、次のように表現しています。

「幼稚園から大学までの縦のつながりと、日本ばかりか海外にまで広がる横のつながりであろうと思います。それはちょうど、縦の糸と横の糸で布が織りあげられていくように、幅広い教育活動が可能であるということであります。これは、他の機関には見ることができない特徴であると思います」

まさに、七十五周年を機に取り組んだ学園マスタープランの策定は、その本学園の特徴とは何か、あるべき姿とは何かを明らかにし、組織力を強化し、力強く邁進するための試みなのです。

●建学七十五周年にあたって　松前義昭理事長（抜粋）

一九七六年五月、創立者松前重義は、湘南校舎における現代文明論の講義で、次のように述べています。

「精神文明の洗礼を受けていない物質文明は、人類の幸福につながるものではない。すなわち、調和ある文明、これが二十一世紀への道であるということ。われわれはこの自然科学の発達の歴史から見ても、このような世界観の上に立って国づくり、世界づくりを行っていく。平和な世界をつくる、友情あふるる世界をつくる。これこそは、人びとを幸福にするためのものであると思うのであります。われわれのこの営みは、明日の日本を支える諸君をつくりたいからであります。それがすなわち、われわれの後世への遺物、遺産であると思う。貴重な遺産として日本の明日の歴史に残したいのであります。輝かしい歴史を残そうじゃありませんか。われわれは諸君を残す、この大学を残す。そうして後世の建設にあたってもらう。われわれは最大の遺産として、諸君に期待するところが大であります」

その中には、教育への熱意と、若者への期待が語られているわけであります。

◇

さて、建学七十五周年という、意義のある節目を迎えるにあたりまして、建学一〇〇周年に向けた学園の総合戦略として学園マスタープランを策定しました。

◇

我々にとって変えてはならないもの、つまり、建学の精神を頂点に、学園のあるべき姿を明示

しています。

◇

この「あるべき姿」は、学園がこれまで築いてきた歴史と伝統の根底に共通するスピリット、「挑戦」「友情」「正義」「愛」「先駆け」を礎とし、建学以来、学園が見据えてきた「世界」「平和」を基軸に、事業や組織文化に関する共通の価値や行動指針を表しました。

そして、学園の資源を最大限に生かしながら「あるべき姿」を体現するため、学園共通の戦略実行計画を設定し、その達成目標に向かって、着実な検証とフィードバック活動を重ねてまいります。

学園マスタープランは、学園が求めていく共通の価値、行動指針に沿った目標を共有し、協力し合う体制を堅持していくためのものです。二〇四二年に迎える建学一〇〇周年に向けた、いわば、未来への航海の〝羅針盤〟となるものです。

◇

私は、この話の冒頭で創立者の「精神文明の洗礼を受けていない物質文明は、人類の幸福につながるものではない」という言葉を紹介しながら、私たちの使命は調和のとれた文明社会を建設するための人材育成である、明日の歴史への貴重な遺産としての人づくりこそ使命であると述べました。そのために私たちはどのように進んでいくべきなのか、その羅針盤として示したものが学園マスタープランです。また、学園マスタープランの策定にあたり、これまでの学園の姿勢「先駆けであること」を、「Think Ahead, Act for Humanity」というメッセージで示しました。

「Humanity」の一語には、建学三十周年で創立者が述べた「ヒューマニズムの上に立つ建学の精神を基調」とした教育体制の確立、そして、建学五十周年で松前達郎総長が述べた「建学の精神である愛と正義の思想の実践」という、学園がこれからも変えてはならないものが表現されているのです。

また、私は当面優先して取り組んでいく戦略実行計画として、安定した財政基盤の確立と人事制度改革の推進を挙げ、さらに外部環境、とりわけ学園の外で起きている高等教育界の情勢や高度情報化社会への劇的な変化に言及しながら、次のように締めくくりました。

「学園マスタープランにおいても、このような変化を脅威とは考えずに、チャンスととらえ、変化に適応し、進化していかなければなりません。そして、建学の精神と、あるべき姿の示すところに向かい、ぶれることなく、力強く進んでいかなければなりません」

さて、学園マスタープランの策定から三年が経過いたしました。そこで、三年間の取り組みについてご報告しておきたいと思います。

まず、安定した財政基盤の確立についてです。学園の拡充期、発展期に借り入れた資金の返済を約定通りに行いました。また、コスト意識を醸成し、新規の長期借り入れに頼ることなく学園経営を行った結果、二〇一七年度の長期借入額の期首額を、二〇一九年度末には半減させることができました。さらにその一方で、二〇一七年度に発表した学園マスタープランの将来計画の実現に向けて新設しました「学園改革推進引当特

定資産」を八十五億円まで蓄えることができました。自然災害による計画外支出や新型コロナウイルス感染症の影響による医療収入の減少など、財務状況が悪化する要因と隣り合わせではありますが、より質の高い、特色ある教育・研究に資するための、足腰の強い財務体質へ向けて着実に成果を上げていることをご報告いたします。

その他、学園マスタープランでは、二〇一七年度から二〇四一年度までを、学園の「躍進期」と位置付け、次のような事業目標を掲げました。

・大学学部改組（全キャンパス立地構造改革）
・一貫教育の到達度を踏まえた入試制度改革
・医学部付属病院部門事業構造改革
・国際交流プラザ（学生寮）建設
・人事制度改革
・教職員研修制度改革
・給与制度改革
・経営情報システム一元化・統合データベース構築

以上のうち、大学の学部改組は今後の立地構造改革のスタートとして、二〇二二年に向けてすでにその全容を明らかにし、準備が着実に進んでおります。そしてまた、その全学的改組を支える事務組織改編に取り掛かり、二〇二一年四月には、学部改組に先駆けて、事務組織の大幅改編を計画しております。

また、経営情報システム一元化・統合データベース構築につきましては、既に学園内プロジェクトを立ち上げ、一元化に向けた準備が着々と進んでおります。本年一〇月には、法人管理部門と初等中等教育部門の一部において、紙ベースでの稟議を廃止し、電子稟議システムの運用を開始しました。今後は、学園の基幹業務システムを体系化しながら導入し、経営情報の一元管理に向けた取り組みを続けてまいります。

そして、来年度からは、人事、給与、研修制度につきまして、抜本的な改革に着手いたします。そのために、二〇二一年四月に法人管理部門の組織を改編します。教職員の能力を引き出す人事制度、仕事・能力・成果及びワークライフバランスに応じた給与・福利厚生制度、多様な力を養成する研修体系を整備し、教職員がやりがいを感じて仕事に取り組める環境づくりのためのさまざまな改革に着手します。

入試制度改革や医学部付属病院部門事業構造改革、そして学生寮の整備につきましても、各部門単位で具体的なプラン策定が進行中です。

このように、学園マスタープランに基づき、建学百周年に向けた中期第一期（二〇一七年～二〇二一年）の三年間で、すでに多くの事業が動き出しています。拙速な改革になってはなりませんが、学園の将来を見据え、足元をしっかり見ながら、着実に進めてまいりたいと思います。

二十一世紀に入って東日本大震災、熊本地震、さらに度重なる集中豪雨による水害など、我が国は大きな自然災害にみまわれ、本学園も甚大な被害を受けました。こうした気候変動に伴う危機管理という課題に立ち向かっていく時代になりました。

半世紀近く前、建学三十周年において創立者が述べた「我々の前進の前には多くの困難が横たわるだろう。

今日までも幾度となく横たわっていた。今後においてまだ多くの闘いが残されていることは想像に難くない」という言葉は、どのような時代においても我々に突き付けられているのです。

そして今、このコロナ禍の中で、教育のあり方、教育機関のあり方も問われています。大学や教育機関の役割は、学位や卒業証書を授与すれば終わりではありません。まさに、学生、教職員、保護者、卒業生、支援をいただいている国内外の多くの皆様との交流、友情、協力によって成り立っており、その環境が学生・生徒・児童・園児の学びと成長を支えているのです。今以上にオンラインによる教育・研究の環境を国際レベルで整備するとともに、さらなる対面授業の充実や学園生活を豊かにする交流の充実に向けた環境を整えていかなければなりません。とりわけ多様で自由な学びの場を提供する大学においては、感染予防対策は、個々の学生のケアを含め極めて難しいものがあります。そうしたことを皆様には、どうかご理解いただき、これまでと変わらぬご支援ご協力をお願い申し上げます。

そして皆様とともに困難を乗越える覚悟を新たにし、羅針盤が指し示す希望の星を仰ぎつつ、「Think Ahead, Act for Humanity」のメッセージを胸に、建学の理想に向かってさらに航海を続けてまいりたいと思います。

学校法人東海大学建学100周年に向けた
総合戦略「学園マスタープラン」の詳細は、
こちらのパンフレットをご参照ください。
▼

Think Ahead, Act for Humanity

学校法人東海大学

学校法人東海大学理事長室

〒151-8677 東京都渋谷区富ヶ谷2-28-4

TEL 03-3467-2211（代表）